

新燃岳噴火の現場より

(読売新聞「防災・減災」連載・20110211 掲載)

特定非営利活動法人レスキューストックヤード
代表理事 栗田暢之

「こんなに恐ろしい思いをしたのは、生まれて初めて。噴き上がる真っ赤な溶岩、何本もの稲妻、そして真っ黒な噴煙が立ち上ったの。あー、怖かった。」と、今なお避難所で生活している年長いた女性が、身振り手振りで必死に話してくれた。

先月 26 日からの霧島連山・新燃岳の連続噴火により、降灰が激しい宮崎県都城市と高原町の現場に立った。町中が灰に包まれ、比較的降灰が少ない地域でも、灰を詰めた袋が路上に幾重にも積まれていた。特に被害が深刻な地域の一つが都城市山田地区である。灰の粒は荒く、バラバラと降ってきたというイメージだ。主要道路の除灰は進められているが、民家や生活道路は手つかずの状態、一面真っ白である。また、高原町は反対にさらさらの灰である。ひとり暮らしの高齢者宅の除去作業を手伝ったが、掃いても掃いても掃ききれない。前日の夜に少し雨が降ったので、それが層になっていて、引っ搔いてやらないと取れないのである。また、屋根に積もった灰の除去が喫緊の課題であるが、素人のボランティアには危険なため、手が出せないのである。現に住民の何人が屋根から落ちてけが人が出ているため、業として建設業の投入や自衛隊の派遣など、公的な支援策が待たれるところである。

日本有数の火山帯なので、現地の方々は慣れているかと安易に思っていたが、そうではなかった。実に 52 年ぶりの噴火で、その時は 1 回の爆発だけだったので避難はせずに済んだという。「婦人会の動員で、木々に降り注いだ灰を長い棒で振り落とした」程度だと、83 歳になるおばあちゃんが教えてくれた。今回の噴火ではこの方も避難所生活を余儀なくされ、やっと自宅に戻られたところである。「やっぱり家がいい。避難所は大変だった。腰が痛くて痛くて、寝返りもできなかった…」と。しかし、噴火活動が終結したわけではなく、また今後の雨の量によっては、土石流の発生も懸念されている。高齢化が進む地方都市において、こうした方々が次の緊急時にも積極的に避難されるかどうか、とても心配である。また口蹄疫や鳥インフルエンザで苦しめられ、さらに今回の噴火でさらに影響を受けている畜産業の方、灰がかぶって全く商品にならず、「もう出荷はできない。どうやって暮らしていくか。」と死活問題となっている農家の方など、目の前の灰との闘いに加え、この先の不安で夜も眠れないという住民の生の声は相当深刻である。

現段階では出口がなかなか見いだせないが、遠く離れた私たちにもできることはある。それは「心配していますよ。応援していますよ。」とエールを送り届けること。当法人も息の長い支援活動を今後も継続していく覚悟である。



新燃岳噴火の様子 (2月2日・鈴木啓二氏提供)



避難所での足湯 (2月8日／高原町内)